

第 15 回例会報告要旨

Y Brasluniau o'r Papurau, y Pymthegfed,

Mai yr chweched ar hugain, 2012

Iki-iki Aging Centre, Osaka, Siapan

第 1 部 : 個別報告 Rhan 1: Papur

産業革命期ウェールズ民衆運動のひとつま ;
レベッカ暴動を中心にして

梶本 元信

The Rebecca Riots:

On the Popular Movement in Wales during the Industrial Revolution period

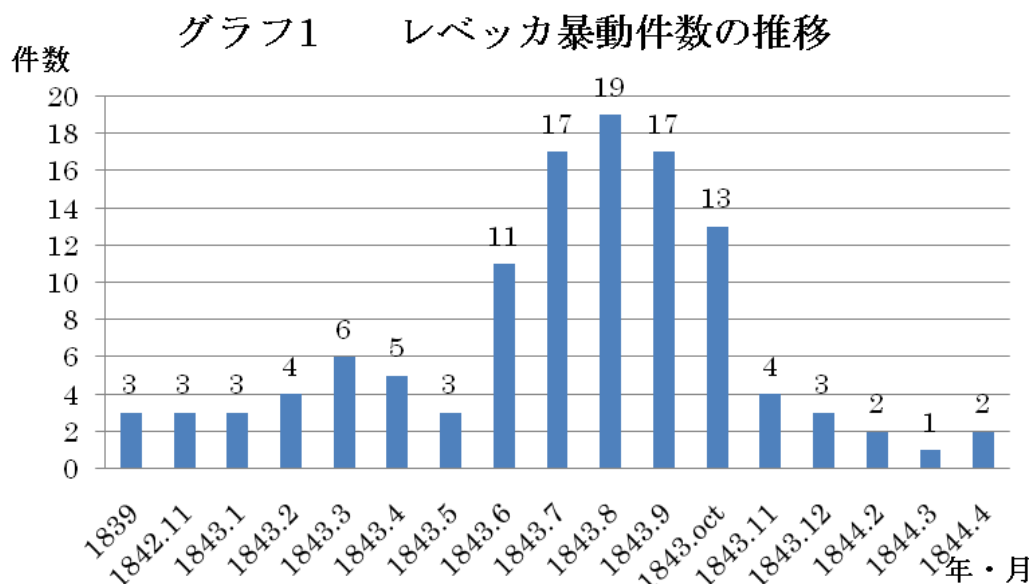
Motonobu Kajimoto

The Rebecca Riots, protests led by local Welsh farmers, took place between 1839 and 1844. The protestors wore women's dresses and attacked, in the main, turnpike trust toll-gates. On occasion they also took action against Union workhouses, Anglican Church priests, and large immigrant land owners and their agents. This paper considers the leaders, their supporters, the causes and the effects of the riots. As for the causes, Hugh Williams, a radical solicitor and Welsh Chartist leader, was suggested to have been a puppeteer behind the scenes. Welsh farmers, whose poverty was deteriorated by toll farming, Poor Law reform and the Tithe Commutation Act, supported the Riots. The Riots succeeded in attracting national support and resulted in the Government changing local road policy.

レベッカ暴動(Rebecca Riots)とは、南西部ウェールズを中心に、1839年から44年にかけて発生した一連の騒擾事件である。暴徒の主たる襲撃対象は有料道路の管理団体であるターンパイク・トラスト (turnpike trust) が設立した通行料徴収所(toll-gates)であったが、時には救貧院、農場、個人の家屋、エンクロージャーの垣根などもその対象にされていた。暴動の主人公であるレベッカ (Rebecca) とは女性の名前であるが、暴動に関わった者の大半は男性であり、その襲撃回数は100回以上に及んでいる。それぞれの襲撃にかかわった暴徒の人数は必ずしも一定ではないが、少ない時の5~6人から多くて400~500人、カマーゼン救貧院事件では2,000人以上が関与している。レベッカの名前が表しているように、暴徒の多くは女装し、たいていは顔を黒く塗ることによって

正体がばれないように変装し、夜間、犯行を繰り返している。

レベッカ暴動は、マーサー暴動のように短期間にある一つの町で集中して発生したのではなく、かなり長期間にわたり、しかも南西部ウェールズの町や村で散発的に、時には連続して発生した。この暴動のプロセスを最初に詳しく考察したのは、H.T.エヴァンズであった。グラフ 1 は彼の研究に若干修正を加えることによって作成したものである。



〔注〕 Evans H.T, *Rebecca and Her Daughters*, Educational Publishing Company,(1910)の chronological index(pp.244-247)を基に若干修正して作成

ほとんどの論者の関心はいかなる人々が暴動の主導者であり、その原因は何であったかという問題に集中している。また、この暴動の原因について調査した政府委員会も複数の原因に言及している。暴動の原因について考える前に考慮しなければならないのは、「レベッカ」は誰か、またいかなる人々がその支持者であったかという点である。まず「レベッカ」は決して一人ではなかったという点で論者の意見が一致している。レベッカ暴動はかなり長期にわたり、同じ夜に異なった地域で発生することもあった。地域的にも広範で、南西部ウェールズ一帯、末期にはスウォンジー近くの鉱工業地域やブレコンシャー、ラドノアシャーにも波及した。したがって、「レベッカ」は当初一人であったのが、後に模倣者が出現したと考えられる。また、たといコマンド部隊のリーダーである「レベッカ」が複数いたとしても、その背後には影のリーダー、悪く言えば黒幕が存在したのではないかと言われている。その候補者の一人はエドワード・クロンプトン・ロイド・ホール(Edward Crompton Lloyd Hall)という地方ジェントリーであり、もう一人はヒュー・ウィリアムズ(Hugh Williams)という

弁護士であった。なかでも、ヒュー・ウィリアムズは急進主義者で、チャーチスト運動の指導者でもあった。彼は裁判所で暴徒を弁護し、ターンパイク・トラストの欠陥を熟知していた。もし影のリーダーが存在したとすれば、ヒュー・ウィリアムズこそがその最有力候補ということができよう。

「ラドイツ」運動（機械打ち壊し運動）の支持者が産業革命によって犠牲になった熟練織布工であったとすれば、「レベッカイツ」運動の支持者は南西部ウェールズ農民の大半を占めていた借地農や零細自作農であった。有力地主・貴族、借地農、農業労働者という三階級分立はイングランドと同様、ウェールズの農村でも見られたが、ウェールズの有力地主・貴族の多くは大抵イングランド出身で、しかも借地農や小農民との格差が極めて大きかった。大地主と小自作農・借地農・農業労働者の断絶、しかも大地主はイングランド出身の不在地主で、農地管理人(bailiff)を雇用して農民を無慈悲に管理していたこと、しかもこうした一部の大地主が政治的・社会的支配者であったこと、こうしたことがウェールズ農民の不満の根底にあった。そして1830年代後半に実施された有料道路管理方法の変更に加えて、一連の自由主義的改革がウェールズ農民の困窮を助長し、暴動となって爆発したのであった。紙幅の関係上それらの詳述は差し控えるが、暴徒の襲撃対象が主として有料道路の料金徴収所であったことに鑑みると、この地方のターンパイク・トラストの経営悪化とそれに伴う徴収所請負制度の導入が主たる誘引になったことは疑いない。南西部ウェールズの有力徴収請負人がイングランド出身のトマス・ブリンであった。彼はイングランドでも多くの有料道路の通行料徴収を請け負う大手業者であったが、利益を増すために徴収所を増設し、従来無料であった貨物にも通行料を課すなど、現地事情を無視したことが農民の不満を爆破させたのである。

レベッカ暴動の大きな特徴の一つは、少なくとも一つの点で、暴徒たちが大きな勝利を得たことであった。イギリス政府は暴動の原因を究明するために南ウェールズターンパイク・トラスト調査委員会を設置した。その委員会の議長を務めたサー・トマス・フランクランド・ルイスはウェールズ人であり、そのほかにも2人のウェールズ人委員が含まれていた。調査委員会はターンパイク・トラストの書記、地主、治安判事、地方農民など多様な階級・職業の人々に証言を求めた。この委員会はカマーゼンを皮切りにウェールズ各地で開催され、タイムズの記者で暴徒に同情的なフォスターも委員会メンバーに同伴した。

委員会報告書は1844年3月6日に発行され、その勧告に従って南ウェールズのターンパイク・トラスト統合法案(*A Bill to Consolidate and Amend the Laws relating to Turnpike Trusts in South Wales*)が提出され、同年8月に通過した。それによって、数多くの非効率的なターンパイク・トラストが統合され、南ウ

ウェールズ各州で道路を管理する単一の委員会が設置されるとともに、通行料も統一されることとなった。また政府はトラストに対して、負債の清算を助けるための資金を提供し、通行料からの収入はそうした負債の支払いや、道路維持に使用されることとなった。イギリスの道路管理は、19世紀後半から20世紀初期にかけて、ターンパイク・トラストから地方自治体による管理へと移行していったが、南西部ウェールズにおける管理方法の変更は、そのモデル・ケースとなったといえよう。その意味で、レベッカ暴動は、イギリスにおける道路行政の変化をもたらす重要な推進力となったといえるかも知れない。